

まちづくりにおける「場」の開放と参加の論理：
新潟県村上市の「宵の竹灯籠まつり」を事例として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-05-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 矢野, 敬一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007745

まちづくりにおける「場」の開放と参加の論理

—新潟県村上市の「宵の竹灯籠まつり」を事例として—

Logic of Opening of the Place and Participation
in Urban Development

はじめに

新潟県最北端に位置する村上市。現在、一〇月の第二土曜・日曜に行われているのが、宵の竹灯籠まつりだ。城下町の旧町人地区の一角に、安善小路あんぜんと言う通りがある。通りには黒塀が続き、風情あふれる一角だ。二〇一三年で一二回を迎えるこの祭りは、ここを舞台として始まった。竹を切ってしつらえた灯籠が小路に何千本と並び、夜、ろうそくの明かりを灯す。小路に沿った寺や割烹、古民家を舞台に尺八、大正琴、ピアノ、フルート、クラシックギターなど、様々な楽器による演奏が繰り広げられる。光と音が織りなす幽玄な時空が、来る人をいざなうてやまない。今ではこの小路からさらに舞台は広がり、小町通りというかつて商店街の中心としてにぎわった一帯にまで及んでいる。

宵の竹灯籠まつりは、村上市の人々によるまちづくりの一環としての取り組みだ。その姿勢は高く評価されており、たとえば財団法人地域活性化センターが主催する「ふるさとイベント大賞」の受賞はその一例と

矢野 敬一
(YANO Keiichi)

(平成二十五年十月三日受理)

なる。第一六回目の選考で宵の竹灯籠まつりは奨励賞を受賞し、二〇一二年三月に東京国際フォーラムで表彰式となった。その評価ポイントには、「地域の資源に光を当て、様々な音楽の演奏により新たな魅力を発信している美しいイベント」という、イベント自体の魅力が一つ。次いで「地域住民が運営に積極的に関わり」「郷土意識の高まりを感じる」といった、住民参加の積極性という点だ。

ただしここでの「住民参加」という点で、注意しておきたいことがある。宵の竹灯籠まつりが開かれるのは、地区名でいえば村上市小町だ。だが当初、このまつりを立ち上げていったのは小町の住人だけではない。小町の中でも安善小路に店や居を構える人に加えて、村上市内とはいえない他の町内の人たちが実行委員となって、第一回目が開催の運びとなったのだ。

宵の竹灯籠まつりをまちづくりという観点からみた場合、たんに地縁をもってその展開を位置付けることはできない。地縁とは異なった論理で、このまつりのために多くの人が集っているからだ。ここからは地域

社会の現状をとらえ返す、一つの糸口を見出しうる。今、情報化や国際化、高齢化といった社会状況のもとで再編を迫られている地域社会に求められているイメージは、どのようなものか。それは「地域社会に根をおろしながら地域社会を超えた住民活動によって支えられる地域社会のイメージ」「いわばネットワーク・コミュニティであり」「アソシエーショナル・コミュニティである」「高橋 二〇〇〇 一〇」という見解を、ここでは参照しておこう。

宵の竹灯籠まつりから浮かび上がってくるのは、それを支えるアソシエーショナルな関係性なのである。そうしたまちづくりを通して現れる開かれた関係性に、参加者たちはどのようにアクセスしているのだろうか。またそうした関係性自体を可能とさせる背景は、いかなるものなのだろうか。後述するように、宵の竹灯籠まつりの実行委員は、まつりの会場となる小町以外に居住する者の方が多い。そこに後で小町全体が地区として合流する形で、現在の宵の竹灯籠まつりは実行されている。アソシエーショナルな関係性と地縁とが、ここでは重層しているのである。その様相はどう把握し得るのか。本稿で論じるのは、宵の竹灯籠まつりを可能とさせる社会的な関係性である。

本論文の構成は、以下の通り。まず宵の竹灯籠まつりがどのような開かれた関係性に根差しているのか、その参加のあり方を通して明らかにしていく。アソシエーショナルな関係性を可能とさせる条件を押しさえるのがここでの目的だ。後述するように、ここではそれだけではなく従来からの地縁も大きな役割を果たしていることを確認していく。次いで宵の竹灯籠まつりにどのように参加者たちはアクセスしていくのか、またそうしたアクセスができるような開放性はいかなる条件に規定されているかを論じる。また従来の地縁に基づいた参加とアソシエーショナルな

参加とを対比させて、改めて宵の竹灯籠まつりがはらむまちづくりとしての可能性に言及していく。

一 小路を「開く」

宵の竹灯籠まつりではそれを支える人たちの開かれた関係性が、大きな特徴となる。さらに会場の小路や演奏会の場となる民家や寺自体、まつり当日は不特定多数に開かれた空間と化す。小路を通して社会的な関係性や空間が、幾重にも開かれていく。

ここでそうしたあり方を問う前に、本稿で対象とする新潟県村上市の概要について述べておこう。村上市は日本海に面した新潟県の最北端の市だ。二〇一三年現在、人口は六万五千人を数えるが、これは二〇〇八年四月に隣接する荒川町、神林村、朝日村、山北町と合併した結果の人数となる。合併直前の旧村上市でいえば、人口三万人ほど。この旧村上市にしても、一九五四年三月に村上町と岩船町、瀬波町、山辺里村、上海府村が合併して市制施行となった経緯がある。現在市内の中心部に位置する旧村上町は城下町である一方、旧岩船町には漁港があり、旧瀬波町は温泉地といったようにそれぞれ異なった個性を持つ町村が合併して成立した。今回取り上げるまちづくりの舞台となるのはこの旧村上町なので以下、村上といえば旧村上町のことを指す。城下町のたたずまいを感じさせるいくつもの歴史的建造物があるのが、ここ村上の特徴といつてよい。

宵の竹灯籠まつりが実施される安善小路は、この旧町人地区の小町の一角に位置する。小町は二〇一三年八月現在、四七世帯、一四〇名ほどから構成されている。七月六日と七日の両日、おしゃぎりと呼ばれる山

車が練り歩く勇壮にして壮麗な祭り、村上大祭に参加する全一九町内の一つが、この小町だ。旧町人地区らしく、町屋の作りの建物が数多く並ぶ一角だ。近隣の大町、三之町とともにこの一帯は市役所他、各種公共施設がかつては集積していて、商店街としてもにぎわいを見せていた。だが昭和三〇年代以降、村上警察署や村上高校、村上郵便局など、多くの施設が市内中心部から移転していく。また郊外の国道七号線沿いに商業施設が数多く出店していく中で、商業地域としての地盤低下も著しいのが現状だ。

宵の竹灯籠まつりの概要について述べる前に、それに先行して立ち上げられたまちづくりのイベント「町屋の人形さま巡り」について、簡単にふれておこう。「矢野 二〇一一」。このまちづくりで中心的な役割を果たしている人物が、吉川真嗣^{まこと}である（本稿では人物名は敬称略とする）。その妻・吉川美貴がこの間の経緯について『町屋と人形さまの町おこし』を著しているので以下、そこから要点を取り上げることにはしたい。「吉川二〇〇四」。

吉川は中央商店街の一角をなす大町にあるサケの製造加工販売業・味匠喜つ川に生まれた。大町は、小町に道路続きで位置する町だ。大学卒業後、東京都内で会社員として勤務していたものの、家業を継ぐために村上に戻ってくるようになった。そこでほどなくして持ち上がったのが、都市計画道路として計画されていた自分の店の前を通る道路の工事着工問題である。それが実現すると大町・小町では道路幅六・五メートルが一気に一六メートル幅にまで広げられて、道路沿いに並ぶ古くからの町屋の作りの建物は、軒並み取り壊さざるを得なくなってしまう。

そんな折に出会ったのが、会津若松市で菓子業を営む一方で当時、全国町並み保存連盟会長を務めていた五十嵐大祐だった。その五十嵐が説

いたのが、道路拡幅によって町屋が壊されれば城下町としての価値を著しく失う、道路を広げて栄えた商店街はどこにもない、村上もその轍を踏むなということである。このアドバイスが吉川にとって、大きな転機となった。一九九八年一月のことである。

当時、吉川の店の外側には商店街のアーケードがかかっているのに加え、ショーウィンドーのある店舗の外観はその頃の商業近代化政策に即したものの以外の何物でもなかった。だがそうした外観にも関わらず、もともとの作りは村上の伝統的な町屋建築であり、そのギャップは大きなものだった。吉川が気付いたのは、この町屋こそが村上の顔にふさわしい場所だということだった。たんなる道路拡幅反対運動ではなく、まずは現在のまちを活性化することに力を注ぐべく、「町屋に光を、町屋をスターに」を目標に活動をしていくことにした。自分の店を保存古材を活用して改修し、町屋独自の風情あるたたずまいへと変えることからその活動はスタートしていく。

町屋の価値を広めるアイデアとして浮かんだのが、内部の生活空間である茶の間にそれぞれの家の人形を飾り、順に巡って見てもらうということである。今に連なる三月の村上の顔、「町屋の人形さま巡り」が誕生した瞬間だ。旧町人地区の商店街から六〇軒の参加を得ていよいよ第一回目にこぎつけたのが、二〇〇〇年三月一日。結果的には三万人以上の人を呼び込み、盛況のうちに閉幕する。翌年九月には家々の屏風を訪れる人に見せる第一回「町屋の屏風祭り」を、新たに開催。たまたみかけるように二〇〇二年の一〇月に開かれたのが、宵の竹灯籠まつりである。

宵の竹灯籠まつりに至るまでの前史を、さらに先の吉川美貴の著作から紹介したい。安善小路には、かつて「御殿」と呼ばれていた木造の二

階建て家屋がある。小路の角地に立つ、ランドマークとなる建物だ。戦後は第四銀行支店長住宅にされていたが、そこが売却となったのである。取り壊しになりかねない事態を避けるために、吉川はこの家を買収することを決断。その風情から「浪漫亭」と名付けて、自らの住まいとした。

この小路沿いには他にも寺や割烹、割烹に通じる坂道など城下町のたたずまいを残す一角となっていた。だがその通りを歩く者が目にするのは、味気ないブロック塀である。それを粋な黒塀に変える「黒塀プロジェクト」を、吉川は割烹新多久しんたくの山貝博、安善寺の大平茂雄、パンのトラヤの高山修とともに二〇〇二年に立ち上げる。いずれもがこの小路沿いの住民だ。黒塀はブロック塀を建て直すのではなく、その上から板を張り付ける簡易工法とすること、塀の板は一口千円で寄付を募るといったように、そこにはすぐにでも行動に移せる独自の工夫が込められていた。

この黒塀からなる小路を活かそうと発案されたのが、宵の竹灯籠まつりだ。この小路沿いに竹を切って作った灯籠を数多く並べ、夜、そこにろうそくの明かりを灯してそぞろ歩く。さらに割烹新多久と安善寺・浄念寺の二つの寺、浪漫亭の計四カ所で、琴、尺八、ピアノ、和太鼓などの演奏会を繰り広げるという内容で、第一回目のまつりが二〇〇二年一〇月一二日・一三日の両日、いよいよ実行の運びとなった。主催はチーム黒塀プロジェクトと、竹灯籠まつり実行委員会名義だ。黒塀プロジェクトの発起人である新多久の山貝博は、頭が切れるだけでなく、何よりも面倒見のよい人だった。お祭りだという先頭に立って差配してくれ、そして顔も広い。幅広い人脈を持ち、何かにつけてよきアドバイザー役を務めてくれた。その一声でなんでも話がうまくまとまる、そんな人だ。「おれにまかせてくれっしや」と、あちこちに面倒がらずに根

回しをしてくれるのが山貝だった。宵の竹灯籠まつり実現にあたって、その人柄が発揮された。

一〇月二〇日付の地元紙『村上新聞』は、第一回目当日についてこう、伝えている。「祭りでは通りを含めた約二百メートルの区間に三千本の竹灯ろうが並べられた」。一二日の午後六時には「澄み切った空の中、あたりの各会場などの演奏会が始まった」とあり、「通りを歩いた観客は二日間で約一万人」とその活況を述べる。当日の演奏をプログラムから見ると、浄念寺では二日間、ともにオーブニングの会場となっていて、初日は津軽三味線、二日目は瀬波温泉の潮太鼓で幕を開けた。それに引き続いて割烹新多久と安善寺、浪漫亭で琴と尺八、雅楽、ピアノと唄、三味線、大正琴の演奏が繰り広げられることになった。

以後、二〇〇七年の第六回では、小町のメインストリートである小町通りにあるカフェ兼宿の井筒屋が演奏会を、同じく小町通りの法音寺で不動明王の開帳と護摩祈祷を実施。さらに二〇〇八年の第七回では、小町が地区として全面的に参加して小町通り一帯にも竹灯籠を並べるようにし、範囲が広がる。あわせて小町通りにある伊勢神明社で小町青年会が獅子舞を奉納し、旧・新潟貯蓄銀行のレンガ倉庫ではビッグバンドによる演奏が繰り広げられた。現在では法音寺境内で、昭和女子大学の学生が独自の竹灯籠のプレゼンテーションも行っている（図1・2参照）。安善小路では竹灯籠まつり実行委員会、小町通りでは小町が地区を挙げて運営を担い、現在に至っている。とはいえまつりとしての内容、運営方法は、基本的に第一回目のものを踏襲しており変わりはない。

宵の竹灯籠まつりは、旧町人地区の一角で開催される。だがその参加という観点で言えば、たとえば村上での一番の祭り、村上大祭でのそれと大きく異なった性格を帯びる。村上大祭はそれぞれの町内の人々を単



写真1 竹灯籠点灯式(写真はすべて2012年撮影)



写真2 竹灯籠まつりオブジェ



写真3 竹灯籠まつりオブジェ



写真4 浪漫亭での演奏



写真5 浄念寺での演奏



写真6 村上南小児童の演奏

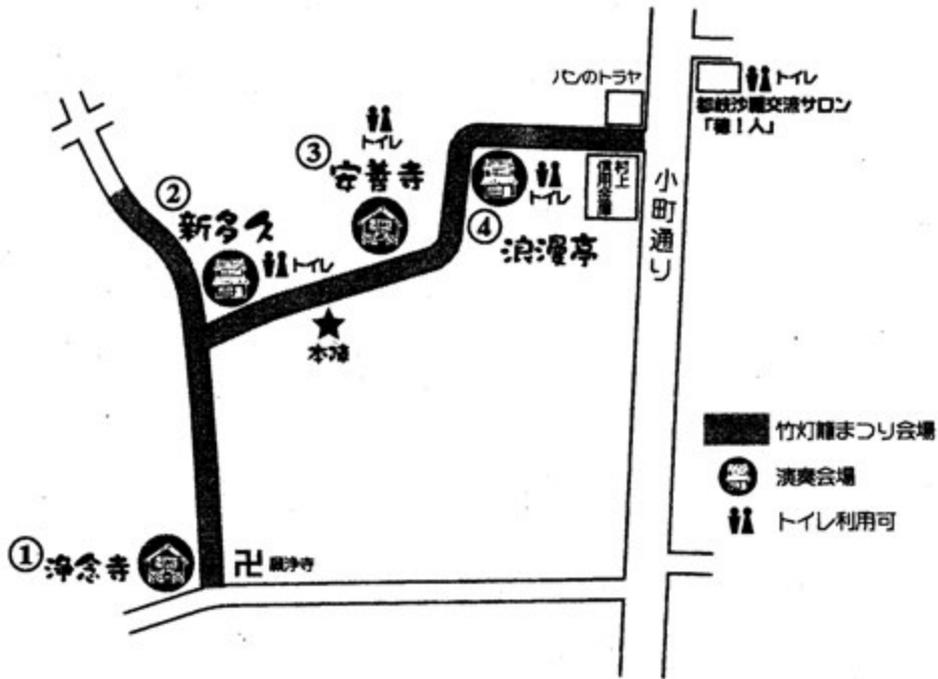


図1 第1回会場(2002年)



図2 第11回会場(2012)

位として運営されている、逆に言えば地縁が参加資格の有無を問う境界線となっているのに対して、宵の竹灯籠まつりでは地縁が参加資格の前提とはなっていないのだ。むしろ、宵の竹灯籠まつりの前史でもある黒堀プロジェクトを立ち上げた四名は小町在住で、現在では地区全体として小町も正式に参加している。だが当初から立ち上げにかかわった竹灯籠まつり実行委員会の構成メンバーの多くは、必ずしも小町在住ではない。後述するように、むしろ市内の他の町内に住む者の方が多数派だ。宵の竹灯籠まつりからうかがえるのは、参加者の関係性が地縁に限定されているわけではない、開かれたものとなっている、という点だ。

こうした参加の開放性に加えて、宵の竹灯籠まつりの特徴づけているのが、会場となる場所の開放性だ。安善小路は道路というその性格からいって、誰しもが通ることができる。だがメインストリートでもないこの小路を普段通る人は、黒堀が続くたまたまを楽しみに足を運ぶ人の数は少なくないといえ、限られている。それが宵の竹灯籠まつりともなると、いつもとはおよそ想像がつかないような人出でにぎわう。たんなる通り道ではなく、小路自体が主役を担う魅惑的な場として多くの人をいざなう。そうした小路としての開放性だけでなく、さらにそこにある民家や寺といった普段、ゆかりのない者に対して閉ざされた空間も、この日には演奏会の会場として多くの人たちに開かれていく。

参加者の開かれた関係性について、まず取り上げていきたい。宵の竹灯籠まつりを実行する核となるのは、まず竹灯籠まつり実行委員会だ。二〇一三年度宵の竹灯籠まつりのウェブサイトに掲載されている委員の居住地を見ることにしたい。対象となる二三名のうち、小町在住者は八名。黒堀プロジェクトを立ち上げた山貝博が故人となり、現在実行委員長を務める山貝の妻世津子および事務局担当の吉川真嗣は、当初からの

参加	月日	作業時間	作業場所	作業内容	備考
5	10月3日(日)	午前9時～12時	イボイボ館裏	竹切り出し(神林村殿前)	雨天決行
9	10月9日(土)	午前9時～12時	新多久前	竹灯籠の配置、ローソクの芯立て、他	
15	*	午後1時～4時	新多久前	竹灯籠の配置、ローソクの芯立て、他	
24	*	午後4時～5時30分	新多久前	竹灯籠への点灯	チャッパマンが読みそくを披露
13	*	午後6時～9時	新多久前	イベント開催時の竹灯籠管理、他	
13	10月13日(日)	午後4時～5時30分	新多久前	竹灯籠への点灯	チャッパマンが読みそくを披露
7	*	午後6時～9時	新多久前	イベント開催時の竹灯籠管理、後片付け、他	
3	10月11日(日)	午前9時～12時	新多久前	会場周辺の後片付け、他	

表1 時間帯別ボランティア参加者数

委員だ。それ以外の小町地区在住の委員は安善小路沿いに居住している者が四名、さらに現在の小町区長、商店会会長などが入っているが、その多くが小町が地区としてまつりに参加してからの委員である。実行委員会に及ぼす地縁の影響は、当初、限られていたことがわかる。他方、この八名を除いた一五名はほぼすべて小町以外の村上市内に居住、あるいはしていた。大半の委員が旧町人地区に住まいを持つ。ここからは小町という地縁に閉ざされることのない、しかし城下町という村上の場所に根差したゆるやかに開かれた委員会のあり方が見えてこよう。

宵の竹灯籠まつりの運営を規定するこうした開かれた関係性は、その実行委員会だけに表出されるものではない。さらにボランティアのあり方も、同様の関係性に根差すものだ。

まずそのまつりへの関わりを、実際に見ていきたい。筆者がそのボランティアに三度目に参加したが、二〇一〇年の第九回宵の竹灯籠まつりである。そのボランティア参加申込書にある作業の日程一覧と参加者数が、表1だ。竹灯籠を新たに作るための竹の切り出しから始まり、当日の竹灯籠の配置、ろうそくに關する作業、灯籠への点火、イベント時のろうそく管理といったように、まつりの流れ全般にボランティアが関わるように日程が組み上げられている。まつり当日ではない一〇月三日の参加者はさすがに五名にとどまるが、初日の参加者数は時間帯によって九名から二四名までと幅広い参加が読み取れる。

参加者の属性は、大きく言えば市内関係者と市外の者とに二分される。市内関係者をさらに見ていくと、小町以外の市内居住者、地域振興局や市役所といった行政関係者、また地元の大学生等で参加者が構成されている。市外からの参加は、筆者がそうであるようにまちづくりに関心がある大学生およびその教員が、その大半を占める。

参加の状況を見ると、すでに記したようにまつりの前段階の竹の切り出しでは五名を数えるにすぎない。また後片付けの一日にしても、三名とさらに少ない。最も多いのは初日の一〇月九日だ。この日は午前中の準備からイベント開催中の時間帯まで四つの時間帯が設けられていて、そのいずれかに参加した者の総数は二九名となる。とりわけにぎわうのが午後四時から五時三〇分までの「竹灯籠への点火」の作業だ。この時間帯は二四名がボランティアに参加する。

次第に夕闇が迫っていく中、小路に何千本となく並んだ竹灯籠に順次、火を灯していく。ろうそくを路上に並べて一つ一つにチャッカマンで点火し、それを火ばさみで竹灯籠の中に納める作業をひたすら繰り返す。ろうそくの芯になかなか着火しにくかったり、火がすぐに消えてしまったり再度着火しなければならなかったりで、実際には思ったほどには作業はうまくいかない。だが闇が濃くなるにつれてろうそくの炎が通りを次第に埋めていく様子を目の当たりにして、飛び入りで作業に参加する人も、例年少なくない。

宵の竹灯籠まつりへの参加者をまつりの「演じ手」ととらえ、他方、まつりを見るだけの者を「受け手」と呼ぶとすれば、ボランティアという演じ手の演じる内容の幅は、広い。竹を伐り出す、あるいは小路に竹灯籠を出して並べるといふ作業は、実際のところ、肉体労働と言つてよい内容だ。ボランティアの人員が少ない年には、限られた時間に追われ

るように作業を進める時もある。他方、竹灯籠への点火はその作業自体、楽しみの要素が強い。しかも飛び入りも可能というように、受け手がたやすく演じ手へと転化できるようになっている。ボランティアと言つてもその関わり方は多様で、受け手に対して柔軟に開かれているのが特徴だ。

各会場での演奏会の演じ手にしても、実質的に謝礼はないのでその参加はボランティアといつてよい。第一回目の宵の竹灯籠まつりでは演奏に加わったのは、四会場で九組。その後、二〇一〇年の第九回宵の竹灯籠まつりでは、一〇月九日・一〇日両日に参加した演じ手の個人およびグループ数の総計は二二に及ぶ。多くが市内の愛好家たちだが、県内新発田市、新潟市、さらに東京都内からの参加者もいる。それが浄念寺、経王寺、安善寺といった寺、新多久と井筒屋という割烹やカフェ、浪漫亭といった個人の家、レンガ車庫、法音寺、伊勢新明社といった小町の由緒あるスポットで演奏を繰り広げる。アマチュアあるいはセミプロいづれにせよ、音楽の演奏を通じた演じ手としてのかかわりも、宵の竹灯籠まつりでの参加の一形態をなす。

経王寺での参加の場合、演じ手は村上市立村上南小学校六年生児童だ。経王寺住職の夫人である圓山亭子先生が村上南小学校五年生の担任ということで、二〇〇八年から寺を会場として児童の器楽演奏が始まった。

村上南小学校では、まちづくりと関連させて三つの学習をこの年から授業で展開しだした。五年生と六年生が主体だ。町屋の屏風まつりの際には、六年生が花を植えたプランターをまつり参加店のうち希望者に贈る。それに対して五年生では町屋の人形さま巡りの折に一枚の紙で複数の鶴を折る連鶴を来訪者に手渡し、また宵の竹灯籠まつりにも参加する。いづれもが総合学習での単元の扱いだ。この小学校の学区は大半を市内

の新興住宅地が占め、城下町の旧町人地区をほとんど含まない。それがゆえに、逆に町屋が広がる地区でのイベントへの参加には、大きな意義を見出し得たのだ。

宵の竹灯籠まつりには、エコヤリサイクルを念頭に置いて村上南小学校では参加した。お金をかけないために、ろうそくは寺で不要となったものをもらいうけ、それを溶かしてケースに流し込んで作る。ろうそくは本堂で灯したものを使うので、大ぶりだ。こうして竹灯籠に入れて灯するろうそくを、最初の年では合計二千個ほど児童が作って参加したのだった。

ろうそく作りに参加したのは二〇〇八年では五年生全員で、約八〇名ほど。舞台となる経王寺に並べる竹灯籠の竹を切りだしに行ったのは、児童の父親たちからなる「おやじの会」。休みの日でなければ集まるのが難しいということで、日曜の午前中に約四時間を費やして作業を済ませた。この会はその年に発足したばかりで、宵の竹灯籠まつり参加のための取り組みが動き出してから校長が呼びかけて生まれた。二期期に入ると、週に三時間ある総合の時間はすべてまつりの準備に充てられることになった。主にろうそくを作ることに重点を置いて、本番に臨んだ。当日の器楽演奏は夜という時間帯のため参加は任意とし、初年度は二〇名ほどが経王寺で披露した。

二〇一二年時点でも、経王寺が舞台の村上南小児童の器楽演奏は六年生が担い手となって続いている。圓山先生の夫君が経王寺住職であるのと同時に小学校の先生で、圓山先生と入れ替わるように南小学校の校長として赴任してきたことが大きい。また毎年、下の学年の児童がこの演奏を見るため、次の年度も児童たちが何をやるのかイメージしたうえで臨むことができる。学年使いなどを通じて保護者の理解が深まってきて

いることも、継続を支えている。

ボランティアとしてまつりに何らかの形で、あるいは演奏の奏者として、小学校児童の一員として、多様な形で演じ手として参加できるのが、宵の竹灯籠まつりだ。こうした参加の開放性を担保する条件としてここで指摘したいのは、演じ手が演じることが可能となる「場」が宵の竹灯籠まつりでは意識的に開かれているという点だ。

安善小路は道路という性格上、常に他者に開かれた「場」であることは言うまでもない。だがここを会場とすることによって、数多くの竹灯籠を並べ、そしてろうそくに点火する作業が生じる。その結果、作業を担う演じ手が必要とする場として、普段この小路を通ることもないような人たちにこの小路は開かれていくことになる。道路、とりわけ幅員の広くない道路は、社会生活の場であり、地域のアクティビティを媒介する空間だと西村幸夫は述べているが「西村 二〇〇六 一三」、安善小路はまさにそうした空間として機能していることになろう。

会場となる寺にしても、境内はともかくとして拝願料を求めない場合、建物の内部は一般的には檀家以外には閉ざされたものとなろう。だが宵の竹灯籠まつり当日には、本堂を中心として内部が演奏のための場として、開かれていく。こうした「場」に檀家以外の人が来て少しでも仏の教えについて認識してもらえれば、それでよいという見方をする住職もいる。そうした考えと相まって、音楽の演じ手とその受け手が共に楽しむ「場」が本堂に成立していく。

黒堀プロジェクトの発起人でもある吉川真嗣が、安善小路の一角にある民家を買って浪漫亭と名付けて自らの住まいとしたことは、すでに紹介した。この浪漫亭では町屋の人形さま巡りの折、国際交流の一環としてウズベキスタンの土人形を公開する取り組みを、すでに始めてい

た。さらにこの建物を地域に再度、還元するべく落語やモンゴルの民俗音楽コンサートなどを開催していた「吉川 二〇〇四 一二二」一三七」。また黒塚プロジェクトの発起人となった割烹新多久では、季津の会というグルメの会を作っており、様々な音楽と食事を楽しむ会をすでに二〇年以上、続けていた。いうまでもなく会の名称は「季節」に「世津子」という名前をかけたものだ。ジャズや独り芝居等、様々な取り組みをしてきたが、次第に日本的な演目に重点を置くようになり、薩摩琵琶や尺八や雅楽といったものが中心となってくる。その一環として竹灯籠で演出した雅楽の演奏等も、宵の竹灯籠まつりの前にすでにあった。

演じ手のための「場」が安善小路で展開していくための芽は、まつりが始まる前にいくつもあったことになる。こうした「場」を大きく展開していったのが宵の竹灯籠まつりだった。演じ手が演じることができ「場」を小路だけではなく、小路沿いに並ぶ寺や割烹、民家に広げることが、演じ手が多様に関わるための仕掛けとして作動し、結果としてより多くの人に開放される祭りとしての性格を色濃くしていく。

現代の都市祝祭の性格について、松平誠は「合衆型祝祭」として位置付ける。そこでは地縁などの固定的な縁は希薄にし働かず、「選べる縁」によって自由に選択された小規模な単位が基礎となるという。こうして創りだされる単位を基礎とした柔らかい個人の集合、互いに顔の見える距離にありながら、なお相互の関係は一過性の集合が作り出す新たな開放系の祝祭が、「合衆型祝祭」なのである「松平 一九九〇 三四五」。宵の竹灯籠まつりでは、演じ手のための「場」が安善小路という空間に幾重にも組み込まれており、それが多様な演じ手の参加を促していく。その意味で、これは合衆型祝祭として位置付けし得るもので

ある。

ただし一つ注意しておきたいのが、二〇〇八年の第七回目から安善小路に加えて、この界隈のメインストリートである小町通りにも会場が拡大していることだ。そこでは小町としての参加、言葉を変えれば地縁に根差す参加をしていることになる。合衆型祝祭としての性格は色濃くとも、それだけにはくれない状況がここからは浮かび上がってくる。中野紀和は都市が地縁や血縁に加え、ボランティア・アソシエーションの複合の上に成り立つという。しかしそれは従来の地縁や血縁によって構成されていた集団の崩壊を意味するのではなく、こうした集団の存続にはボランティア・アソシエーションは意味を持つ。両者の存在にとつて、互いが不可欠だという相互補完性があることにはあると中野は述べる「中野 二〇〇七 三」。地区としての小町は、その意味で竹灯籠まつり実行委員会と補完しあいながら、まつりを運営していることになる。

宵の竹灯籠まつりは小町在住の核となる者を中心に、市内に住む様々な立場の人に対して実行委員として開く形で始まっていった。まつりの展開は、訪れる者に対して会場のあちこちの空間を開いていく過程でもあった。そこに実行委員からボランティア、演奏者等、様々な立場から「演じ手」として関わっていくのが、宵の竹灯籠まつりの特徴だ。だがそれにとどまらず、地縁としての小町をも巻き込む形でまつりはその後、「演じ手」とまつりの「場」を広げてゆく。

二 まつりの参加への回路

宵の竹灯籠まつりは、そこに関わる「演じ手」への、また「場」としての開放性が特徴だ。ではこうした開放性に対して、「演じ手」がどの

ようにアクセスしていくのか。またアクセスを可能とさせる開放性は、どういったことに由来するのか。その参加への回路について、ここで目を転じていきたい。

なぜ宵の竹灯籠まつりに参加するのか。まつりを立ち上げた一人、山貝博の妻の山貝世津子によれば、宵の竹灯籠まつりの目的はまちおこしということではなく、皆で楽しむことにあるという。結果として多くの人が見に来てくれ、にぎやかになった。まつり当日に本陣に控えていた折、観光客からこのまつりは何のためにやっているのか、まちおこしのためなのかと問われたことがある。山貝は即座にまちおこしのためではない、子供からお年寄りまで皆が楽しむためにやっていると答えると、相手もそれで納得した様子を見せた。参加する者皆が幸せで楽しむという気持ちでなければ、まつりをここまで続けることは到底できない。当日の何千もの幽玄な竹灯籠の明かり、あちこちから流れてくる様々な演奏は見事だ。だがそれを実行に移すまでは、大変な準備と当日の作業が必要だ。それを何かのためといったような使命感だけでやると、息切れをしてしまう。来てくれた人が素敵だ、感動した、ありがとうという笑顔を思い浮かべながらやらなければ、うまくいかない。皆で楽しもうという思い、またその達成感があるからこそ、まつりは続けられると山貝は言う。

「楽しむ」ということそれ自体も、人によって様々な思いを内に秘める。当初、ボランティアという立場で参加し、その後実行委員となったのが、村上市の市会議員でもある相馬エイだ。子どものころ、女性だということから村上大祭の屋台に乗ったり、あるいは引くことはさせてもらえなかった。屋台を引く綱に触ることさえ、できなかった。悔しい思いをしつつも、そういうものだと諦めざるを得ない。結婚後住んだのは、市内

とはいえ村上大祭の屋台がある旧町人地区ではなかった。しかし子供たちが小学生になると、祭りに参加させたいと、実家のある町の区長にお願いに行った。自分が参加できなかっただけに、子どもたちは祭り好きに仕込んだ。

自分が祭り好きだけに、のりのよい性格で傍観者ではられない。相馬が宵の竹灯籠まつりに参加したのも、そうした思いからだ。皆と苦労してまつりを実行し、訪れた人がすばらしい、すごいと言ってくれるのがうれしい。そうした人たち多くの喜びが、自分たちのやりがいの原動力となっているのだ。それは実行委員やボランティアでなければ味わえないことだという。子どもの少なくなった今とは違い、かつて村上大祭ではジェンダーという線引きによって、参加の可否がおのずと決まった。村上大祭への思いは、ジェンダーという線引きがない宵の竹灯籠まつりへの参加で実を結んだということになるか。

NPO法人都岐沙羅^{つぎさらか}パートナーズセンターの理事、NPO法人まちづくり学校の代表理事であり、村上市内のデザイン事務所所属する大滝聡は、二〇年以上にわたってまちづくりに取り組んできた。宵の竹灯籠まつりの第一回目からの実行委員の一人である。まつり当日、竹を何本も組み合わせた大ぶりのオブジェが安善小路の要所要所に配置されて目を引くが、その制作を一手に担うのがこの大滝だ。

まちづくりにとって参加することは、何よりも大切なことだと大滝は言う。自分で見るだけでなく、いいこと悪いこと両面を含めて自ら体験することがまちづくりの醍醐味であり、まちを愛する気持ちを大きくする手立てとなるし、得られるものは大きい。

大滝自身、まちづくりに関わる仕事に二〇年以上、従事してきた。当初はほとんどボランティアでまちづくりをやってきたが、それを積み重

ねているうちにどうしても「仕事」になってくる。さまざまな場所でもちづくりを教え、講演をする。だが自らが関わるまちづくりで、一つだけは純粹にボランティアとして楽しめるイベントを残しておきたい。ならばよその町のボランティアではなく、地元のみちづくりの主体的に自分が関わっていきたい。自分の町のまちづくりでなければ、意味がない。それが大滝にとって、宵の竹灯籠まつりとなった。

アートやデザインがもとと好きだということもあり、竹灯籠まつりにアート表現の可能性を大滝は見出す。あえて大袈裟に言えばアーティスト魂を発揮できるのが宵の竹灯籠まつりだと、大滝は言う。その楽しみがあるからこそ、一〇年以上にわたって続けられてきた。広い会場すべてに自分の目が行き届くわけではない。だが自分の作品として、ここは自分が作り上げたのだという感覚を持てるイベントだからおもしろい。アートの直結しているイベントであるがゆえに関わり続けられるというのが、大滝にとつての「楽しみ」だ。

宵の竹灯籠まつりはこうした個々の思いを受け止めるだけの開放性を備えたイベントだということが、実行委員それぞれのまつりへの向き合い方からは浮かび上がってくる。「演じ手」ひとりひとりの「楽しみ」を軸にしてアクセスできるのが、この祭りの特徴だ。

ただし当初からの竹灯籠まつり実行委員の多くの住まいが小町以外ということによるためか、その語りからは小町それ自体の話は、出てこない。小町としての場所性は、ここではどちらかというと後景に退いているかのようである。場所性が「演じ手」にとって相対的に希薄だということ、宵の竹灯籠まつりのはらむ開放性をここでは担保しているということになるのか。

だがその一方で小町通りをメイン会場として運営を担う小町の実行委

員の語りからは、その場所性が濃密に浮かび上がってくる。

小町の区長を務め電気店を営む近藤正敏にとつて、かつての小町通り界隈は何よりもにぎわいの場として記憶に残っている。宵の竹灯籠まつりの会場の一つであるレンガ倉庫は、旧・新潟貯蓄銀行で村上では最初のコンクリート造りの建物である。レンガ倉庫というものの、実際はタイル張りとなっているがその頃、目新しい作りであったことに変わりはない。銀行当時、内部にはカウンターがあり、奥に金庫室があった。その後、商工会議所へと変遷を重ねて、現在では第四銀行の所有で車庫代わりとなっている。この近辺にあった官公署では、警察署や旧の市役所があったことも記憶している。特に行政司法、金融の機関が集中していたのが小町だ。そのため村上大祭ではおる法被のマークを見ると、小町では「都」の文字をあしらったものとなっている。

大町・小町は、旧岩船郡一帯ではずいぶん繁栄したところである。どちらかという大町は商業地域、小町は官公所が集積したところだ。近くの三之町にある村上市立村上小学校ではひとクラス五〇人以上、一年八クラスというように、子どもがあふれかえっていた時代もあった。児童総数は二千人以上在籍していたことなるのか。村上市立村上中学校も一学年当たり同程度の生徒数であり現在、市役所があるところには新潟県立村上高等学校もあった。近藤が村上高等学校の生徒だった時、一クラス五〇人ほどで一学年一クラスあった。総計すると小生から高校生まで五千人近くがこの一帯に通学していたことになる。それぞれの教職員の数も合わせると、相当の数になる。さらに今の郷土資料館が所在する場所には、県の地方事務局があった。学校だけでなく、官公署関連の施設がすべて大町、小町、三之町一帯に集中していたのだ。

そのため周囲にはいくつもの商店や飲食店だけでなく映画館、パチ

ンコ屋といった娯楽施設も整っていた。岩船郡内であれば金融行政関係の仕事はすべてここで片づけることができ、さらに遊びも何でもできる。それだけにぎやかな繁華街だった。

だが昭和四〇年代頃から次第に状況が変わっていく。商店街から一キロ以上離れた村上駅前、まず大型スーパー・ジャスコが開店。その後、県の地方事務局が村上総合庁舎として村上駅近くの田端町に統合・移転する。村上高等学校も、今は田端町に所在する。村上中学校も場所を移して村上第一中学校として再出発。一気に学校や行政関係の施設が市内中心部から離れることになったのだ。こうした移転への反対の動きは、近藤の記憶にはない。やはり車社会を迎え、駐車場のニーズに対応できないという事実は動かさなかったからだろうか。とはいえまだ昭和四〇年代は商店街には集客力があって、まち中には元気があった。昭和五〇年を過ぎた頃だろうか、衰退が目に見えるようになったのは。当時の商店街の中心的な人たちは、まさか今ここまで衰えるとは想像もしなかったろう。

宵の竹灯籠まつりにより集い、安善小路から小町通りにかけて足を運ぶ多くの人々。こうやって人が集まって来る姿に、かつてのこの界隈のにぎわいをどこか重ねてみたい、そういった気持があるかもしれないと近藤は言う。にぎわいを創出したいというのは商店だけでなく、この地域に暮らしている人にとってもやはり同じ願いだ。以前のようなにぎわいを取り戻してほしいというのは、誰もの願いなのだ。だからこそ様々な仕掛けをして、できるだけ人が集まる場面を数多く作ることが大事なのではないかと、近藤は考える。人がたくさんいるというだけで、うきうきとして気持ちまで変わってくる。

人は人が集まるところにやって来るものだ。さびしいところには行き

たくはない。そうした相乗効果があるので、にぎわいの創出は次の展開につながって来る。たとえばこの一帯では町屋の人形さま巡りから始まり、町屋の屏風まつりが加わって、そして宵の竹灯籠まつりが続いてくる。そうした結果、日常的に人が訪れるようになり、一部ではあるがその恩恵を受ける商店も出てきている。近藤にとって人通りが絶えない商店街という小町のかつての場所性が、宵の竹灯籠まつりに重ね合わせられていく。そしてそれは商店街としての新たな繁栄への願いでもある。

そうした小町のにぎわいに満ちた場所性を宵の竹灯籠まつりに見出し、小町商店会の会長を務め、印章店を営む船山一雄も同じだ。さらに一歩踏み込んで、人の流れをまちの中心部に呼び戻すのがまつりの最大の目的だと船山は言う。

高度経済成長期の時代、昭和三〇年代から四〇年代にかけて、小町通りのにぎわいはものすごいものだった。市の中心部として一等地だったのだ。それが郊外型の店舗に人が流れてしまっているのが現状だ。直接商売にはならないかもしれないが、せめて年に何回かにぎわいを取り戻し、それぞれの店について認識してもらいたい、そのための一環が宵の竹灯籠まつりだ。

小町商店会としては個店の再認識してもらうために、まずはここまで来てもらわないことには始まらない。そこからだ。長い目で見てお金が回っていくような仕組みを作り上げる契機としてとらえたいと、船山はまつりを位置付ける。宵の竹灯籠まつりは、市外の観光客が中心ではなくてどちらかという地元志向だ。遠くからというよりは、近くに住んでいる人に足を向けてもらいたい。こういうイベントに町内や商店会が関わっているとすることが重要なのだ。「あのまちは元気があるな、こういうことをやっている」ということを一般市民に意識してもらおうこと

は非常に重要だ。お得意さんの事業所や会社で、「もうすぐ竹灯籠まつりだね」と話をもちかけてくれたり、終わった後演奏の感想を耳にしたりする。そういう活動は直接商売に関連しなくても、商店会の姿勢として高く評価されているのではないかと船山は感じている。自動車だと市内中心部に来なくても、用は足せる。そうではなく、中心部を歩いてもらうことが大事なのだ。歩くところにある店にも目がいく。車で素通りしてはわからない個々の店を、歩くことで再認識してもらおう。それが宵の竹灯籠まつりの効用だと、船山は言う。

小町通りの場所性を規定しているのが商店街としてのにぎわいだとすれば、割烹新多久のあるあたりは料亭や割烹が並ぶ艶めいた場所だ。かつては芸者置屋がこの小町だけではなく近くの大工町、寺町に何軒もあった。若旦那衆の中にはこの一帯に通い詰めた者もいたということから、新多久から塩町に抜ける坂は親不孝坂という名も持つ。

安善小路沿いに家を構え、新多久で長年板長として勤めたのが、竹灯籠まつり実行委員の一人である丸山一だ。戦後、近在の山林地主や官公庁関係者、商店のお偉方が新多久の客層だった。特に山林地主に勢いがあった頃は、材木屋の入札があるとそのたびに宴会といった具合だ。これから行くと予約が入るや、何時間かすると山林地主を先頭に四〇人、五〇人とまとまってやってくるのだった。そうした景気の良い時代があった。

かつてニツパチという言葉があった。二月・八月は客が少ないものの、あとは平均して新多久は忙しかった。このあたりには他にも吉源、たにがわや他、料亭がいくつもあつた。芸者置屋もあり、夜になるといかにも情緒のある通りだ。そうしたたまたまいと、宵の竹灯籠まつりの夜のにぎわい、風情は重なり合ってくる。商店主とはまた違った形で、かつて

の近辺のにぎわいが想起されて宵の竹灯籠まつりに投影されているのだ。いずれにせよ小町に住まう竹灯籠まつり実行委員会の人たちの語りからは、それまでの小町という「場」がはらむ場所性が浮かび上がってくる。こうした場所性を通して、参加者たちはまつりへとアクセスしていることがわかる。小町以外の竹灯籠まつり実行委員にとって場所性の希薄さがまつりの開放性を担保していたのとは逆に、小町在住の実行委員にとってはその濃密な場所性がまつりへのアクセスを可能とさせる開放性へと転化しているのだ。

一方では希薄な場所性、他方では濃密な場所性という二律背反を、どのように見ればよいのか。改めて安善小路という小路の歴史性を振り返ってみたい。

今でこそこの安善小路は黒塀が続き、浪漫亭や安善寺、新多久といった村を代表するランドマークが並ぶ通りとして知られている。だが、かつてのこの小路の様相は今とは異なる。小町商店会会長の船山一雄の回想では、ここは以前は何かの近道に使うような小路にすぎなかった。あのあたりは子供の頃は竹藪で、かくれんぼなどをする遊び場という程度の認識に過ぎなかったという。新多久で板長を務めこの小路沿いに住む丸山一にしても、似たような印象を持つ。かつてはこの小路は、にぎわいとは無縁だった。子どもの時、村上小学校への通学路だったが、杉の大木があつてお化けでも出そうな雰囲気だった。夜ともなると、人通りも絶えてしまう。イメージとしては、暗い。

安善小路はその意味で、村上の中でも特に印象に残るような場所性を帯びていたわけではなかったことになる。たしかに新多久脇の塩町に抜ける坂は、親不孝坂という名前でも知られているような場所性をはらむ。安善小路を抜けて小町通りに出れば、岩船郡一帯一の繁盛で知られた大

町・小町の商店街が広がる。だがこの小路自体がはらむ場所性は、もととは希薄なものにしか過ぎなかったのだ。豊かな場所性を帯びた坂や通りに挟まれた、いわば「空白」と言ってもよいような立ち位置にあったのが、かつての安善小路だったのである。

同じ界限で繰り広げられる「町屋の人形さま巡り」「町屋の屏風祭り」の二つのイベントに共通する「町屋」という言葉。町屋が軒を連ねるのは小町通りだ。家々が間口を接して通りに面しているため、そこには塀を設けるような余地はない。他方、安善小路には、すぐにも町屋とわかる建物はない。家々の外には塀が連なっている。それがゆえに通りに黒塀を巡らしても、何らの不都合もない。村上の町人地区をイメージさせる小町通りでの町屋の作りを補完するかのように、安善小路に続く黒塀は位置付けられる。そうしたことが可能となるのも、この小路のはらむ「空白」という性格ゆえだ。

さらにこの小路に関する伝説や言い伝えが、とりたてて知られているわけではないことも、その「空白」性を裏付ける。黒塀プロジェクトの発起人の一人、吉川真嗣が宵の竹灯籠まつりを始めるにあたって、ヒントにしたのが大分県臼杵市のうすき竹宵だ。イベントを紹介するそのウェブサイトには、「臼杵の誇りである『臼杵石仏』は真名長者と呼ばれる人物によって造られたと伝えられています」と、臼杵の紹介がある。そして「うすき竹宵は、長者夫妻と玉絵姫が待つ臼杵へ都から『玉絵箱』とともに帰ってきた般若姫の御霊の里帰りしたという伝説を再現したものです。ほのかな竹ぼんぼりのあかりが灯るなか、小五郎、玉津姫、玉絵姫、そして大勢の里人たちが待ち受ける中、臼杵の港に都から『玉絵箱』と般若姫の御霊を載せた船が到着いたします」と、イベントが演じる地域の伝説について紹介する。うすき竹宵はこうした伝説がはら

む物語性をベースにして、イベントとして構成されている。

だが宵の竹灯籠まつりでは、うすき竹宵のようにこの地に伝わる伝説が召喚されているわけではない。村上は城下町であり、その歴史性に根差した語り呼び起こそうとすれば、それはたやすく可能となる。にもかかわらず、宵の竹灯籠まつりにはそうした物語性はまったく、ない。まつりをめぐる故事来歴に関しては、何らの説明がないのだ。イベントとしての見た目はある程度、共通するとはいえ、その点でうすき竹宵とは大きくたもとを分かつ。安善小路のはらむ場所性がいわば「空白」であるのと同様、宵の竹灯籠まつりも、その全体を統括する物語性という観点でいえば「空白」なのだ。

だが逆にその空白だということ自体が、多様な立場からの参加を可能とさせる開放性を保証している。安善小路と宵の竹灯籠まつり双方の全体を統括する場所性、物語性がないがゆえに、様々な「演じ手」がそこへアクセスすることには抵抗感が伴わない。一人一人の多様な思いを受け止めめるような「場」としてまつりは受け止められているし、それを可能とさせているのがこの「空白」という性格なのだ。

とはいえ宵の竹灯籠まつりは、城下町村上の旧町人地区を舞台としている。安善小路には、そうしたたまたまを感じさせるものがあることも確かだ。ジョン・アーリは「ノスタルジア」は社会的に編成された構造だとし、問題はどのような過去を選んでそれを保存するのかということだ、という「アーリ 一九九五 一九五」。安善小路は旧町人地区の中でも、その場所性が相対的に「空白」だからこそ、小路に沿って黒塀を巡らし竹灯籠を幾千となく灯して、そこにふさわしい城下町としての風情を構成することが可能となったのだ。

その一方で二〇〇八年の第七回から参加している小町通りは、どう位

置づけられるのか。すでに述べたようにここは、かつてこの一帯を代表する商店街としての役割を担ってきた場所性を持つ。小町の古文書の紹介と解説を付した『村上城下旅籠屋の町・小町』の巻末には、「小町絵図軒並表」がとじ込まれてある。これは小町通りの家々の変遷を寛永一二年から昭和五二年まで、九つの時代に分けて図示したものである。「大場 一九八七」。そうした作業が可能となるだけの文書の蓄積と、その歴史性に裏打ちされた場所性がこの界限にはあることを、この図は端的に示す。⁸⁾安善小路の「空白」とは、その点で対照的だ。

こうした濃密な場所性は、小町通りを舞台とする宵の竹灯籠まつりにも色濃く反映されることになった。小町通りで演奏会がある会場は井筒屋、レンガ車庫、法音寺、伊勢神明社の四カ所だ。いずれもが小町の歴史性を色濃く帯びた、濃密な場所性をはらんだ施設だという点で共通する。

今でこそカフェ兼宿である井筒屋は、建物が登録有形文化財として登録されており、松尾芭蕉とゆかりがある。レンガ車庫はすでに述べたように旧・新潟貯蓄銀行でありその後、第四銀行が所有者となった建物で、近代に入ってから小町の繁栄を象徴する作りだ。法音寺は真言宗で、元和七（一六二一）年に創立されているから江戸時代初期以来の歴史を持つ。毎月二七日と二八日には、住職による護摩祈祷がある寺だ。

伊勢神明社は、村上の代表的な祭礼である七夕祭りとの縁が深い。旧町人地区の七夕祭りは毎年八月一日・一七日両日に実施。行事が八月にあるだけでなく、各町内から祭り屋台が出て練り歩き、また獅子舞があるのがよその七夕との大きな違いだ。この七夕祭りは伊勢信仰と結び付き、当日、各町内から出る祭り屋台の修祓はこの伊勢神明社でなされる。金糸の刺繍を施した化粧前掛けを締め、帷子を着用して手甲、脚絆のい

でたちの子供がさらさらをすりながら獅子と戯れて踊るのが、村上の獅子舞の特徴だ「村上市 一九九〇 四五六」。

宵の竹灯籠まつりでの演奏プログラムは、こうした場所性が強く刻印されたものとなっている。松尾芭蕉ゆかりとはいえ、現在の井筒屋の内부는しゃれたカフェだ。ここではこれまでフルートとピアノ、ギター、ハーモニカといったどちらかというと西洋楽器中心のプログラムが組み立てられた。レンガ倉庫にしても、長らくジャズの会場となってきた。この二カ所での演奏は、繁華街だった小町のモダンさを反映したのものとなっている。その一方で、法音寺では一日あたり四回に区切られた演奏の時間帯のうち、二回は必ず住職による護摩祈祷がなされるようにプログラムが生まれ、現在に及ぶ。また伊勢神明社は、小町青年会による獅子舞単独の会場となっていて、他には音楽演奏はない。この二カ所では護摩祈祷と獅子舞奉納という、地域に古くから伝わる儀式、芸能の披露がなされている点が、多様な音楽演奏を繰り広げる他会場とは大きく異なっている。

毎年八月二七日・二八日の両日は法音寺の御開帳だ。この寺は別称、お不動様。その名の通り、不動明王像が厨子の中に安置されていて、それを年に一度御開帳する。他にも毎月二七日・二八日の例祭では護摩祈祷を執り行い、町内の者が参加している。その後、皆持ち寄りでのまま、飲食を共にするなおらいとなる。気心の知れた者同士での情報交換の場だ。ある時、地域振興のシンクタンク関係者との話の中で、小町独自の宝があるはずだから見直して磨くようにというアドバイスを受けた。そう考えると護摩祈祷はなかなか普段見ることができないものではないと、小町の人たちは気付く。そこで音楽の演奏だけでなく、法音寺にも焦点を当てるべく、護摩祈祷を宵の竹灯籠まつりの演目の一つに取り入れる

ことにしたのであった。

村上大祭が羽黒神社の例大祭となるのに対して、八月の七夕祭りとはもと伊勢神明社の祭りだ。この伊勢神明社は通称、オタヤサマ。そうした来歴があるので、小町の人にはやはりここは祭りに外せないという気持ちがある。そうなってくると、当然のことながら青年会による獅子舞も欠かせない。小町での宵の竹灯籠まつりの演目が、こうして形を整えていく。宵の竹灯籠まつりは、小町に古くから伝わる祭礼ではない。

だがそうした機会に護摩祈祷や獅子舞といった小町にとって独自性ある文化資源が、その場にふさわしいものとして召喚されているのだ。

小町では地区として青年会だけではなく、小町商店会、小町PTAにもお願いをし、それぞれの役割を担ってもらおう。PTAには竹灯籠を小町通り沿いに並べて、点火するように依頼する。青年会には竹を並べるところから、獅子舞の披露、終わった後の消火の確認、二日目の撤収作業に至るまでお願いしている。また宵の竹灯籠まつりでかかる経費を小町、小町商店会では毎年予算化している。商店会加盟店からは一店あたり三千円の協賛金で協力を得ているといったように、宵の竹灯籠まつりにまちぐるみで取り組んでいるのが小町だ。

こうした協力が可能となっているのはなぜか。小町の人何人もの口から出たのが、村上大祭の存在だ。三七〇年以上続いている村上大祭が、町内の年寄りから孫まで世代を超えたつながりを作り上げている。だからこそ青年会やPTAの人たちも手伝ってくれる。ひと声かけると、すぐに応えてくれる。町内のきずなづくりに大きな役割を果たしているのが、村上大祭なのだ。まちづくりの原動力として、村上大祭という存在が大きいという。

すでに一〇回を超える宵の竹灯籠まつり。だがこの間の道のりはけっ

して平坦ではなかった。安善小路に面した割烹新多久が、二〇〇五年に全焼。その後、多くの人に慕われてきた新多久の山貝博が亡くなるといったように、まつりの運営に影を差す事態が続いた。だがそうした危機感こそが、町内の人の気持ちを一つにしてくれたということもあった。やはり村上大祭があったからこそ、宵の竹灯籠まつりの危機に即応できたという人もいる。新興住宅地で新たなイベントを始め、続けていくのとは状況が違う。危機に対して対応できるような町のきずなが、村上大祭を通じて醸成されているというのだ。

村上大祭だけではない。ボランティアを募るといった呼びかけよりも、獅子舞を出すと言ったほうが旧町人地区では若い人が集まる。獅子舞やさらに村上大祭の屋台を出すといえれば皆、集まるのが村上だ。町内ごとに小さいころからお囃子を習って祭りに参加する。そこで培われた上下関係があるので「言われたら来ねばねえ」ということになるのだ。

そうしたこともあり宵の竹灯籠まつりの小町通り会場では、村上大祭での法被を着てくるようにと地区の人に要望している。何よりも町内、商店会、青年会、PTA関係がこぞって参加するので、祭りとしての浮き浮きする高揚感を共有できる。一〇月ともなると、日によっては寒い防寒の役割も出来るので一石二鳥だ。小町の人皆、この濃紺の祭りの法被をもっている。様々なイベントのユニフォームとして使うと祭り気分にもさせてくれる。祭りという皆、それに集中してやろうという気になる。そういう意識形成に役立つのが法被だ。もともと村上大祭の伝統があり、その延長線上にこうしたイベントを位置付けて皆の一体感を盛り上げていくためのアイテムとして、法被は最高のものだという。宵の竹灯籠まつりへのアクセスからうかがえるのは、一方ではアソシエーショナルな関係性であり、他方、地縁に根差した祭礼を基盤とする

ような関係性である。ではその違いは、どこから生じてきているのか。安善小路は場所性、また物語性という観点から言えば、「空白」だということだが、様々な演じ手を招きこむための開放性を担保していた。「空白」であるがゆえに、多くの人にとって宵の竹灯籠まつりにアクセスしやすい環境となっているのだ。だが小町が運営をになう小町通りでは、事態は全く異なる。法音寺での護摩祈祷、伊勢神明社での獅子舞の奉納といったように、地域の文化資源が総動員され、小町としての場所性、物語性が強く押し出されてくる。また村上大祭での法被を参加者が身にもとるといったように、祭礼を基盤とした社会的関係性が、その地区の参加者が宵の竹灯籠まつりにアクセスするための大前提としてある。こうした異なった論理による参加が互いにもく住み分ける形で展開しているのが、現在の宵の竹灯籠まつりの運営ということになるか。

最後に

新潟県村上市で毎年一〇月第二土曜・日曜に催される宵の竹灯籠まつりからうかがえるのは、それを実行に移すアソシエーション的な関係性であるのと同時に地縁という、二重の関係性である。前者ではまつりの舞台となる小町の住人を核として、小町以外に住居を構える主に市内旧町人地区の様々な立場の人が関わっている。

アソシエーション的な関係性を可能とさせる開放性は、どのように作動しているのか。宵の竹灯籠まつりはまず、市内に住む様々な立場の人に対して実行委員として開く形で始まっていった。まつりの展開は、会場となる安善小路だけではなく、寺や民家など会場のあちこちの空間を訪れる者に対して開いていく過程でもあった。そうして開かれた「場」

には実行委員だけではなく、ボランティア、演奏者等、様々な立場から「演じ手」として関わる事が可能となってくる。こうした「場」の重層性が、演じ手の多様さにつながり、まつりとしての開放性を担保していく。さらにそれにとどまらず、地縁としての小町をも巻き込む形でその後、演じ手との「場」をまつりは広げて現在に及ぶ。

こうした演じ手たちは、どのように宵の竹灯籠まつりへアクセスしているのだろうか。小町以外に住まう竹灯籠まつり実行委員が多い安善小路でのまつりに表出されるアソシエーション的な関係性は、場所性や物語性という観点から言えば、「空白」という性格を帯びる。そのこと自体が、小町にゆかりのない人々をアクセスへと駆動させる要因となっていた。「空白」であるがゆえに、それが開放性へとつながり多くの人々をアクセスへといざなう。

だが小町が地区として運営をになう小町通りでは、事態は全く異なる。法音寺での護摩祈祷、伊勢神明社での獅子舞の奉納といったように、ここでは地域の文化資源が総動員され、小町としての場所性、物語性が強く押し出されてくる。また村上大祭での法被を参加者が身にもとるといったように、祭礼を基盤とした社会的関係性が、その地区の参加者が宵の竹灯籠まつりにアクセスするための大前提としてある。

こうした異なった論理による参加が互いにもく住み分ける形で展開しているのが、現在の宵の竹灯籠まつりの運営ということになるか。まつりの現代的な可能性の一端が、ここにある。

(1) 一九九〇年頃から社会意識として「美しさ」への希求が高まりを見せていき、地域の合意によって豊かな自然や歴史を活かして地域の固

有性を発揮しているという傾向が強まっていく。そうした中で「美しいまちづくり条例」が各地で制定されていった。そうした努力の集積が、二〇〇四年の景観法制定へとつながっていった「西村 二〇一〇六四」。町屋の魅力を再発見する村上での一連のまちづくりも、こうした流れに位置付けられるものと言ってよい。

(2) とはいえ市内中心部の人口減少に伴い、村上大祭の参加者を確保するという意味で町外に住む児童が祭りに加わるような事態も一般化してきている。村上市郷土資料館の桑原猛はボーダーレスな参加、としてこうした事態を位置付けている「矢野 二〇一〇 三三」。

(3) まつりの名称は「宵の竹灯籠まつり」だが、実行委員会の名称からは「宵の」という文字が外れ、たんに「竹灯籠まつり実行委員会」となっている。

(4) <http://www.om-creation.com/~takedourou/member.html> ここに掲載されている人数は二六名だが、当初参加していたもののその後まったく関与しなくなった者三名については、本人の脱退の意思表示がないということでサイト上からの名前の抹消はない。本文ではこの三名を除いた二三名を対象として扱う。

(5) 宵の竹灯籠まつりでは二〇〇三年の第二回から、竹灯籠への点火作業への参加を呼び掛けている。事前の申込制ではなく、当日直接会場に行く形式だ。こうした参加しやすい状況を作り、次第に他の作業へとボランティアの内容を拡大していったところに、まつりの開放性がはらむ柔軟さを読み取ることができる。

(6) <http://www.takeyoi.com/usuki-takeyoi.html>

(7) むろん、うすき竹宵と宵の竹灯籠まつりそれぞれを支える人的資源の差も、こうした違いの背景にあることを指摘しておきたい。NPO

法人うすき竹宵が組織化され、またうすき竹宵実行委員会が臼杵庁舎産業観光課に設けられているように、官民挙げて運営されているのが、うすき竹宵だ。他方、宵の竹灯籠まつりは行政に依存することなく、市民手作りのイベントである。しかも竹灯籠まつり実行委員会といっても、それ専門に携わるメンバーがいるわけではなく、一人一人がまつり当日、持てる力以上の力を出し切って運営が成り立っているという感じだ。筆者自身、ボランティアに参加して当日、果たしてこれで間に合うのかと危惧する場面もあったが、個々の実行委員の働きで何とかなってしまう、何とかしてしまっている。したがってある意味、なんらかの物語性をまつりに付与させるだけの余裕がないといえ、ないという事情がここにはある。

(8) なおこの「小町絵図軒並表」には、安善小路も掲載されているが、そこでは昭和四年と五二年との対比があるにすぎない。小町通りが江戸期からの歴史性を持っているのは対照的である。

(9) 安村克己は「観光」の仕掛けは、まちの開放化の手段ともなり、さらにまちを訪問する者との交流の場を設けることによって、「まちの社会関係」を再構成する契機にもなると述べている。こうした開放化によってまちへの帰属意識が共有され、内部の求心化がもたらされるといふ「安村 二〇〇六 一〇六」。宵の竹灯籠まつりでも、こうした状況が見出しうる。しかし安善小路と小町通りとは様相が異なっていたように、「まちの社会関係」がどのように再構成されるかは、その地域が置かれている状況や社会的文脈に応じて丹念に読み取る必要がある。

- アーリ、ジョン 一九九五 加太宏邦訳 『観光のまなざし 現代社会におけるレジャーと旅行』 法政大学出版局
- 大場喜代司 一九八七 『村上城下旅籠屋の町・小町』 村上市小町区
- 吉川美貴 二〇〇四 『町屋と人形さまの町おこし』 学芸出版社
- 高橋勇悦 二〇〇〇 「地域社会の社会学―地域社会の現状・課題・研究」
- 高橋勇悦編 『社会変動と地域社会の展開』 学文社
- 中野紀和 二〇〇七 『小倉祇園太鼓の都市人類学 記憶・場所・身体』 古今書院
- 西村幸夫 二〇〇六 「序説 今なぜ路地なのか」 西村幸夫編 『路地からのまちづくり』 学芸出版社
- 西村幸夫 二〇一〇 「まちづくりの変遷」 石原武正・西村幸夫編 『まちづくりを学ぶ 地域再生の見取り図』 有斐閣
- 松平誠 一九九〇 『都市祝祭の社会学』 有斐閣
- 村上市 一九九〇 『村上市史 民俗編下巻』 村上市
- 安村克己 二〇〇六 『観光まちづくりの力学 観光と地域の社会学的研究』 学文社
- 矢野敬一 二〇一〇 「祭りを継続させる・町屋のまちづくりを立ち上げる―空洞化・高齢化する市内中心部とその存続戦略―」 静岡大学生涯学習教育センター 編 『高齢化社会における地域とまちづくり』
- 矢野敬一 二〇一〇 「高度成長期下の都市計画とまちづくりの現在―新潟県村上市「町屋の人形さま巡り」に見る家屋空間の再編成と公共性」 『国立歴史民俗博物館研究報告』 第一七一集